

僕がかわいがるから

小川未明

青空文庫

しょう 正ちゃんの、飼かっている黒くろ犬いぬが、このごろから他家よそにわとりの鶏とを捕とったり、うきぎを捕とたりして、みんなから悪にくまれていました。こんどやってきたら、鉄砲てつぽうで打ち殺ころしてしまうといっている人ひともあるくらいです。けれど、正ちゃんしょうは黒犬くろいぬをかわいがっていました。「クロや、もう僕ぼくといっしよでなければ、出ださないよ。ひどいめにあうからね。」と、いってきかせました。

クロは、尾おを振ふって、正ちゃんしょうの体からだに頭あたまをすりつけて、クン、クンと喜よろこんで鳴ないていました。

「わかれれば、もういいのだよ。僕ぼくは、おまえをかわいがってやるから。」と、いって、クロの頭あたまを抱かかえて、その顔かおに自分じぶんのほおをつけていました。

しかし、お父さんとうや、お母さんかあは、クロを捨すててしまうといっせいでいられました。そして、相談そうだんをなさっていられたのです。

「なにか、正二しょうじのほしいものを買かってやれば、いうことをきくかもしれない。」と、お父さんとうは、おっしゃいました。

「さあ、どうでしょうか。二輪車りんしゃをほしいといっていましたから、犬いぬを捨すてたら、買かつ

てやるといつてみましょうか。」と、お母^{かあ}さんは、お答^{こた}えなさいました。

「ああ、それがいい、きいてみてごらん。」と、お父^{とう}さんが、いわれました。

お母^{かあ}さんは、さつそく、正^{しょう}ちゃんに、そのことをおつしやいました。

「おまえの好き^すなものを買^かつてあげるから、クロをだれかにやつておしまいなさい。」と、おつしやいました。

すると、正^{しょう}ちゃんは、即^{そく}座^ざに、

「僕^{ぼく}は、なにもほしくないから、クロをやることはいやです。」と、お答^{こた}えしました。

「上^{じょう}等^{どう}の二輪^{りん}車^{しゃ}を買^かつてあげても。」

「二輪^{りん}車^{しゃ}なんか、ほしくありません。」

「いつか、ほしいといったでしょう。」

「それは、ほしいが、クロをやってしまうことはいやです。」

お母^{かあ}さんは、考^{かん}えていられましたが、正^{しょう}ちゃんが、いつか、野^や球^{きゅう}のミットをほしいと
いったことを思^{おも}い出^だされました。そこで、こんどは、

「ミットも買^かつて、あげるけど。」と、おつしやいました。

ミットときいて、正^{しょう}ちゃんは、お母^{かあ}さんの顔^{かお}を見^みました。

「ミットも買^かつてくれるの？」と、お母^{かあ}さんに、ききかえました。

「ミットも買^かつてあげます。」

お母^{かあ}さんが、こうお答^{こた}えなさると、正^{しょう}ちゃんは、頭^{あたま}を振^ふつて、

「ミットなんか、ほしくない。」と、いいました。

「じゃ、犬^{いぬ}をやめて、伝^{でん}書^{しょ}ばとになさいな、はとは、やさしくて、そんな悪^{わる}いいたずらをしませんから。」と、お母^{かあ}さんは、おっしやいました。

「え、伝^{でん}書^{しょ}ばとを飼^かつてくれるの？」と、正^{しょう}ちゃんは、目^めをかがやかししました。

「ええ、鳥^{とり}屋^やへいつて、買^かつてきてあげますよ。」

「二輪^{りん}車^{しゃ}とミットと伝^{でん}書^{しょ}ばとを買^かつてくれない？」と、正^{しょう}ちゃんは、大^{おお}いに欲^{よく}張^ばりました。

「さあ、お父^{とう}さんが、なんとおっしやるかしれませんが、そうしたら、正^{しょう}ちゃんは、クロを捨^すててしまいますね？」と、お母^{かあ}さんは、念^{ねん}を押^おされました。

「どうしても、クロを捨^すててしまうの、かわいそうだなあ。だれかにやってしまえばいいではないか。」と、正^{しょう}ちゃんは、考^{かん}えていました。

「それは、聞^きいてみますが、あんなに大^{おお}きくなつた犬^{いぬ}をだれも、もらうものはないでしょ

う。遠くへつれていつて、置いてくるんですね。」

このとき、正ちゃんは、クロと約束したことを思い出しました。僕は、おまえをかわいがつてやるからといったことを思い出しました。

「僕、いやだ、やはり、クロを飼つておく。」と、きつぱりといいました。

「伝書ばとはいらないうですね。」と、お母さんが、おっしゃいました。

伝書ばときくと、正ちゃんは、また迷つてしまいました。犬もいいが、あのかわい

らしい目をしたはともほしかつたのです。それに、とは卵を生むからよけいなのです。

「お母さん、僕、考えてみていい？」と、正ちゃんは、いいました。

「ああ、よく考えてごらんなさいね。私も、二輪車に、ミットに、伝書ばですから、

考えてみなければなりません。」と、いつて、お母さんは、笑つていらつしやいました。

正ちゃんは、草の上に横になつて、大空をながめながら、

「はとと二輪車にしようかなあ、しかし、クロがかわいそうだし……。」「と、いつて、

考え込んでいました。そして、考えに疲れて、そのまま目を閉じて、じつとしていて、

自分を探しにきたクロが、ハツ、ハツと、息を切つて、頭のところへ走つてきたけはいが

しました。

「こうして、死んだふりをしていよう。」と、正ちゃんは、思いました。

クロは、正ちゃんの頭をかぎました。つぎに顔をなめました。正ちゃんは、おかしくて、しようがなかったけれど、我慢をしているとクロは、なんと思ったか、——ほんとうに死んだと思ったのか、急に悲しそうな声を出して、ほえはじめました。そして、また正ちゃんの顔をなめ、起こそうと着物をくわえて引つ張ったのです。正ちゃんは、はね起きました。

「クロ！ 僕は、こんなにやさしいおまえを捨てようなどと思って悪かった！ 堪忍しておくれ、もう、いつまでもかわいがって、どこへもやらないから。」と、いつて、二人は、草の上で元氣よく、相撲を取って遊んだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「台湾日日新報」

1936（昭和11）年5月22日

※表題は底本では、「僕《ぼく》がかわいがるから」となっています。

※初出時の表題は「僕が可愛がるから」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕がかわいがるから

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>